

明治学院大学 社会学・社会福祉学会



学内学会会報 第34号

社会学部設立60周年を祝して

社会学・社会福祉学会会長 / 社会学部長 新保 美香（社会福祉学科教員）

社会学部設立60周年、おめでとうございます。学内学会会員のみなさまとともに、この記念すべき年をお祝いできますことを、とても嬉しく思います。

社会学部は1965年に社会学科、社会福祉学科の2学科で設立されました。社会学部の前身は、明治学院に1928年に設立された社会科です。その後、1934年に社会事業科となりましたが、戦時体制下で、1942年に厚生科、1944年に経営科と名称を変えました。戦後、1946年に社会科に戻り、1949年に明治学院が大学になったときに文経学部社会科、1952年には文学部社会科となり、1965年に現在の社会学部が誕生しています。こうして歴史を振り返ってみますと、60年にわたり学部と両学科の名称を変えずに今に至ることができていることは、大変貴重なことであると気づかされます。

社会学部では、社会学、社会福祉学という2つの学問を追究することを通じて、人と社会の現実を見つめながら、それぞれよりよく在るために何ができるかを考え、実践できる人材を育成してきました。両学科とも、従前より、社会調査実習、社会福祉実習、演習、フィールドワークなど、実践的な学びを

重視した教育を行って参りました。このような経験の蓄積は、2020年春、新型コロナウイルス感染症の拡大により、対面での教育に制限が生じてもお、オンラインを通じて、また、感染拡大防止に最大限の配慮をしながら、人と社会とつながりながら学び続けることを、支える力になっていたものと思います。

1991年に設立された、学内学会(社会学・社会福祉学会)の活動も、社会学部における教育、人材育成の推進力となってまいりました。2024年度には、学会誌が『STEPS』に刷新され、学生部会のメンバーが、瑞々しい感性で“社会学部の今”を届けてくださっています。そして、例年開催されている学内学会・研究発表会では、多くの研究発表のエントリーがあり、学部生、大学院生、卒業生、教職員の、充実した研究報告の場となっています。このような、学内学会における活動を支援してくださる卒業生部会のみなさまに、心より感謝しております。また、日頃より、学内学会の活動を支えていただいている事務局の二木鈴香さんに、この場をお借りして、深く御礼を申し上げます。

これからも、学会員のみなさまとともに、力を合わせて歩みをすすめていくことができますよう願っております。どうぞ引き続き、よろしくお願いいたします。

地方区から全国区へー社会学部60周年に寄せて

名誉教授 橋本 茂（元社会学科教員）

1959年4月、社会学がどのような学問であるかも知らずに、ただひたすら尊敬する牧師先生の助言に従って、文学部社会学科に入学し、社会学コースを専攻しました。当時の私の関心は、社会学よりキリスト教にありました。入学するとすぐに＜キリスト教学生会＞に入会し、聖書研究、ボランティア活動などに力を注ぎました。一年次の時の「伊勢湾台風の被災地」名古屋で泥にまみれながらした救援活動は忘れられません。

当時の社会学科には社会学コースと福祉学コースがあり、福祉学コースは1928年に創設された「社会科」を前身とする伝統あるコースであり、日本の社会福祉学のパイオニアでありました。その卒業生は日本の各地にある各種の社会福祉の現場や行政分野で活躍していました。このコースは、日本に名を知られた教授からなり全国的に有名でした。

それと比べると、社会学コースは「地方区」的な雰囲気でした。しかし、私の入学した頃は「全国区」的な社会学コースへの転換・発展への歩みを始めた時でありました。

私が2年次の時に、日本社会学会の会長を歴任した新明正道先生が東北大学から赴任してこられました。3年次の時には、東北大学の大学院を修了し、若手の社会学者として嘱望されたる吉田裕先生が赴任してこられました。いずれも、日本の社会学界で活躍する先生でありました。

私は3年次で吉田先生のサブゼミを、4年次で卒論ゼミを履修しました。4年次になるときに卒論のテーマを提出することになり、私は、キリスト教であるからという理由で、M.ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の研究を選び、先生のご指導を申し出ました。先生は「ウェーバー研究は掃いて捨てるほ

どあるから、今更君の出る幕ではない」私の申し出はばっさり切り捨てられました。それに代わって、若手の社会学者で注目されているハーバード大学のG.C.ホーマンズの研究を勧めてくれました。私は素直ですので、さっそく大学の図書館に行き、出版されたばかりの訳本『ヒューマン・グループ』を借り出し、卒論のために読みました。ところが、読んでも全然理解できません。最初は私の頭が悪いからと思い、繰り返し読みましたが、わかりません。ひょっとしたら、悪いのは私の頭ではなく、翻訳ではないかと思い、先生に訪ねてみたら、翻訳に原因があることが分かりました。早速、紀伊国屋に行き、原書The Human Groupと、新著 Social Behaviorを購入しました。そして、辞書を片手に、重要なところをノートに書き写しながら、一年かけて卒論を書きました。私の卒論を読んだ先生から、社会学理論の研究者の集まる東北大学大学院への進学を勧められました。

1963年4月から1968年3月までの5年間、東北大学文学研究科社会学専攻の院生として交換理論の研究に、適当に遊びながら、専念しました。

私の大学院在学中の1965年4月に明治学院大学は文学部社会学科を廃止し、社会学部を創設し、その中に、社会学科と社会福祉学科を設置しました。それを記念して、『日本社会学会』が明治学院で開催されました。こうして、明治学院の社会学科は、日本の社会学会から認知されました。

1968年4月 私は、大学院での5年間の研究生生活を終え、明治学院大学社会学部に専任講師として赴任しました。その社会学科は

社会学のほぼすべての分野をカバーするスタッフで満たされていました。ただ恩師である新明先生は中央大学に、吉田先生は上智大学に転任されていました。私は社会学原論という大袈裟な昭和のタイトルの付く科目を担当しました。

1968年から1972年頃は、大学紛争の時期であり、授業も研究も静かにすることは出来ませんでした。そんな状況の中でも、私たちは、教授会や学科会が終わると、二次会と称して、五反田の居酒屋に出かけ、学部・学科の在り方について、飲みながら食べながら喧々譁々、最終便まで語り合いました。

1975年頃から、大学は授業も研究も静かにできるようになり、いわゆる、正常化しました。私は大学より研究休暇をもらい、1980年から1981年にかけてハーバード大学に客員研究員としてホーマンズ先生のもとで交換理論の講義を聞くことができました。

ところが、この頃から、年に1人、2人と、社会学部創設時からの先生方が定年で退職を迎えることになりました。一緒に大学紛争という一大難事の解決のために考え、そして立ち向かい、時には、五反田の飲み屋で終電まで飲み食いして語り合った先生方と1人2人とお別れすることは本当にさびしいことでした。その先生方のほとんどは今は天に召されて会うことができません。

私たちに代わって、若い才能豊かな先生方がこの社会学部を担い、教育、研究に献身し、日本の社会学界に確固とした地位を築いてくれていることをうれしく思います。

深谷美枝先生を偲んで



深谷 美枝先生

深谷美枝先生のご逝去に際して、あらためて心から哀悼の意を表させていただきます。

さて、先生のご専門は社会福祉学、特に障害者福祉領域を中心としたソーシャルワーク論と、社会福祉実習教育論になります。

先生は大学院時代、アメリカ流のソーシャルワーク論を修得されました。特にそのなかで、グラウンデッドセオリー・アプ

ローチなどの質的研究法に関する研究では、まさにわが国の“草分け”的存在であったと言えます。しかし、あらためて先生の研究業績書を拝読すると、先生は決して初期のそうした質的研究法の先駆者に安住することなく、中期以降はそれをさまざまな形で応用しつつ、ソーシャルワーク研究をさらに深めていくことになります。また、先生は敬虔なクリスチャンで、牧師として活動をしていたこともあり、先生のご研究には「スピリチュアリティ」をテーマとした研究も

和氣 康太（社会福祉学科教員）

多く、そこにはキリスト教の影響を読み取ることが出来ます。

一方、先生はソーシャルワーク教育、すなわち質の高いソーシャルワーカーの養成にも情熱を持っていました。“福祉はひとり”という名言がありますが、先生はソーシャルワーク研究に取り組むだけでなく、その成果をわが国の、大学という教育の場で、どのように止揚していくか、そしてそれによって世界でも通用するソーシャルワーカーをいかに育てていくかについて考えていたように思います。そのことは、先生の後期の研究のなかにわれわれへの“メッセージ”として残されています。

僭越ながら、先生のご生涯をこのように振り返ってみると、まさに先生は社会福祉、特にソーシャルワークの研究と教育にその一生を捧げられたと言っても過言ではないと思います。

先生がお亡くなりになったことは、われわれ社会学部社会福祉学科と大学院社会福祉学専攻だけでなく、ひいてはわが国の社会福祉、ソーシャルワークの研究と教育にとって、誠に大きな存在を失ったと言えます。しかし、残されたわれわれは、そのことで悲嘆に暮れるだけでなく、先生のご遺志を受け継ぎながら、いまこそそれを乗り越えて、前に進んでいく必要があります。

少子・高齢化の進展や、人口減少社会の到来などによって、

社会環境が大きく変化し、国（厚生労働省等）もまた、それを受けて「地域共生社会」の構築を福祉政策の基軸としています。そして、そのなかで質の高いソーシャルワーカーの確保と育成、そして定着への期待が、福祉の現場でも高まっています。

幸い本学において先生から薫陶を受けた学部生は、その多くが福祉の現場でソーシャルワーカーとして実践をしていますし、同様に大学院生は社会福祉の研究と教育の場で、大学教員等として活躍をしています。彼らはこの学びの場で受けた、先生からの教えを大事にして、文字通り、“地の塩”として、この社会を支えています。われわれはいまこそ、先生が残してくださった、最大の財産である“彼ら”を大切にしていかなければならないと思います。

最後に個人的なことで恐縮ですが、先生と私は40年来の友人（同志）になります。この間、わが国の社会福祉は大きく変貌を

遂げ、また本学の社会福祉学科も、大学院社会福祉学専攻も時代や社会、また社会福祉研究・教育の変化に応じて変わって来ました。しかし、それでも先生と一緒にあって、ある時はお互いに切磋琢磨しながら、またある時はお互いに助け合い、支え合いながら、わが国の社会福祉を、ソーシャルワークを少しでも良くしたいという同じ志をもって、研究者として、また教育者として共に生きて来たことの幸せを心から感じています。

深谷先生、長い間、本当にお疲れさまでした。また、いろいろとありがとうございました。いまはどうか天国でゆっくりとお休みください。そして、われわれと、先生の教え子たちを天国から見守っていてください。

春日清孝先生を悼む

野沢 慎司（社会学科教員）



春日 清孝先生

春日清孝先生が2024年1月18日に62歳で急逝された。青梅市の梅岩寺、その見事な枝垂れ桜の根元の納骨堂内に、今は眠る。桜が2度目の満開を迎えた時期に、樹木葬墓地の前でご家族とお話する機会を得た。ようやくお礼とお別れを伝えられたように感じる。以下では、生前のように春日さんと呼ばせていただきたい。

春日さんは、明治学院大学社会学部社会学科および大学院社会学研究科社会学専攻のご出身で、中学・高校の社会科教諭一種免許も取得されている。1996年度の「基礎演習」（社会学科1年次必修科目）のTA、翌年度の共通科目「社会学」担当非常勤講師を皮切りに、30年近くにわたって本学の教育に携わった。これまでに、必修の「基礎演習／アカデミックリテラシー」や「コース演習」から、「社会学基礎演習」、「古典講読」、そして調査に関わる「フィールドワーク演習」、「社会調査実習」、さらに社会福祉学科の「社会学概論」まで、2桁に上る多様な科目をご担当くださった。2013年度のサバティカルの際には、私のゼミを引き継いで「演習2／卒業論文」も担当くださった。放送大学や神奈川大学などでも、教育・子ども・家族・地域などに関わる授業を多数担当されてきた。幅広い領域をカバーする教育者として、その右に出る者を私は知らない。春日さんの教えを受けた卒業生（在学生）はどれぐらいの数に上るのか。社会学教育への貢献の面で実に大きな存在だったことに思い至る。改めて感謝の意を表したい。

その研究面の貢献も忘れてはならない。春日さんとの出会いは、私が本学に赴任し、彼が社会学部附属研究所の研究調査員に

赴任した1999年に遡る。組織化の動きが始まった第1回特別推進プロジェクトの準備を担った春日さんが、新任教員の私を訪ねて新しいプロジェクトの計画を教えてくれた。その後、社付研・調査研究部門主任を拝命した私は、春日さんとの二人三脚でプロジェクト研究を進めることになった。後に私のライフワークとなったステップファミリー研究の、おそらく日本で初めての調査の共同研究者になってくださった。データ分析や報告書作成に汗を流し、大阪や広島に出張したことを懐かしく思い出す。任期末の2001年2月の慰労会で私は、「明学に来たばかりで勝手のわからないまま部門主任となった私は〈のび太〉そのもので、必要なモノや情報をそのポケットからすぐに出して助けてくれた春日さんは私にとって正に〈ドラえもん〉です」と挨拶した。記憶の中の春日さんは、前面に大きなポケットが多数付いたアウトドア・ベストを身につけていて、いつも頼もしく微笑んでいる（写真はその慰労会での1枚）。

春日さんは、1997年頃から沖縄に関わる研究プロジェクトにも携わっていて、2005-2007年度の特進プロジェクト「沖縄読谷村研究」へと展開した。春日さんのフィールドワーカー／ネットワークとしての偉大さを物語る出来事は、ご葬儀に（そして10ヶ月後の墓参にも）沖縄県読谷村と鳥取県淀江町から多くの方々が駆けつけたことである。春日さんは、長年通った調査地の方々とどれほど強い絆を築いていたのかと驚かされた。一方、ご研究の本流テーマは教育・子ども・ジェンダーであり、多くの共著書・論文を発表してこられた。その母体である、本学教職課程の望月重信先生を中心とした分厚い共同研究ネットワークの存在も葬儀の場で直接知ることになった。

今後のご活躍が期待されていた春日さんが、朝早く戸塚の授業に向かう電車の中で倒れられたことは痛恨の極みである。ご本人の無念さも深かったに違いない。だが今は、多方面に枝葉を広げて走り続けてきた春日さんが、枝垂れ桜の樹の下でゆっくり休まれることを祈るばかりである。

春日清孝さんの三種の神器

石黒 眞里（元社会学科助手）

今日は青梅梅岩寺、境内の枝垂れ桜に抱かれている供養墓前で話しています。都内よりも気温が低めなため、この時期桜をはじめ花々が咲き乱れています。墓誌に刻まれたお名前を目の前にしてもうお会いできないことを実感します。

春日さんとは小さなご縁がいくつもありました。まずは、社会学科竹内真一先生のゼミの出身であること、学年が違いましたので学生時代に話をする機会はなかったものの、その後は折につけ「竹内先生はこんなこと言ってたよね」「竹内先生だったらどう思ったかな」とよく話しました。また、私が杉並区に住んでいた時期、春日さんも同じ区内にお住まいで杉並図書館を利用する際に何度かばったりとお会いしましたね。街の小さな図書館は、静かな住宅街にある居心地のよい場所で私も好きでした。

その後引っ越された立川市も私が子どもの頃に育ったところでした。ちょうど駅周辺の再開発が行われていた時期にあたりますのでその変貌も見届けられたことと思います。そして、青梅に越されました。今回久しぶりに訪れましたが、中央線沿線で育った私にとっては青梅鉄道公園や御岳山など思い出の地域です。梅岩寺は三方山の麓にあり、ハイキングコースをよく歩いていらしかった話を美香さんからお聞きました。春日さんが愛した青梅の自然の懐の深さを感じます。

さて、社会学科科目の「社会調査実習」をのべ6年間担当してくださいました。今回2023年度最後1回の授業を残して帰らぬ人となってしまい、誰よりも驚かれたのは春日さんご自身ではないか

と思います。学生たちの報告書は無事に発行されてお送りしましたのですでに読んでいただけたことと思います、頑張りました。

春日さんが実習を初めて担当されたのは2001年度でしたね。まず2003年度までの3年、そして2021～2023年度の3年間における調査実習に共通するテーマは「地域の教育力」でした。特に2002年度の読谷村の調査合宿に同行した私はそのパワフルな調査の壮絶さに春日スタイルの確立を見たような気がします。徹底的にインフォーマントに寄り添う姿勢は最後まで一貫していました。沖縄県読谷村での実践的な取り組みについてはその後も継続的に行われ、ご研究の主体であり、ライフワークに繋がるものと思っていました。

専門的なことは別の方に譲り、その貫かれた春日スタイル、一つめは圧倒的な「読書量」ですね、いつも授業前に寄ってくださいましたね、授業の進捗についてはもちろんですが「今、こんな本を読んでいるんだよ」と見せてくれる書物にはいつもたくさんの付箋が付けられていて常に膨らんでいました。二つめは、トレードマークである「カメラマンベスト」、汗をふきふきポケットを開け閉めする姿は忘れられません。そして三つめ、必ず別れ際にはやさしさに満ちたまなざしと共に言うてくださった「それではあらためまして」、いつまでも忘れません。また、季節の移り変わりを一緒に楽しむため青梅に来ますね。ありがとう、春日さん。

あっ、私この3月で明治学院大学を定年退職しました！

2025年4月8日 晴天の青梅梅岩寺にて

総会後の特別講演会

三輪清子先生「子どもと里親～地域社会における緩やかなネットワークの形成を目指して～」に寄せて

社会学・社会福祉学会 学生部会STEP 濱崎 麻由（社会福祉学科3年）

2024年6月22日に第34回社会学部学内学会総会が行われた。総会後の特別講演会では、本学社会学部社会福祉学科准教授である三輪清子先生の講演会が行われた。「子どもと里親～地域社会における緩やかなネットワークの形成を目指して～」というテーマの下、前半は、里親制度の詳細と基礎情報について解説され、後半は、地域社会における緩やかなネットワーク形成を目指すための調査とその結果を紹介するという構成で進められた。

三輪先生が児童養護施設で約2年間勤務した際、施設の子どもを介して素敵な里親さんとの間接的な出会いがあった。夏休み期間中にその里親さんの元で生活した子どもが「自分だけを見てもらえる」という経験を通し、劇的な変化を遂げていた様子を目の当たりにした。この経験から子どもが家庭で過ごすことが子どもの成長に計り知れない影響があることを感じた。アメリカでは、日本とは違い親が「里親をやっている」と言っても、周囲の

反応はごく普通のものである認識である。先生自身も5年前に里親ができるようになり、小学1年生に預かったその子どもは今6年生になったそう。里親は良いことであるはずなのに、なぜ日本では里親が広がらないのかと思い立ち、里親についての研究を始めた。

里親制度とは、家庭での養育が困難又は受けられなくなった子ども等に、家庭環境の下での養育を提供する制度であるが、養育の目的は一定期間後に血縁関係のある実親の元に復帰させることである。一方、特別養子縁組は、恒久的・全面的に養親がその子どもの親になり、将来的に実親以外の後ろ盾が必要な子どもが利用する制度である。現在、施設入所率は76.5%であるが、里親委託率は1年で1%ずつ増加しているものの23.5%と非常に少ない。里親制度の動向では、2000年以前は法改正の数が極端に少なかった。里親等家庭委託率の国際比較を見ると、日本は比較国10カ国中最も低く、政府が里親制度に対し

危機感を覚え始めたことが2000年以降の里親制度の法改正数の増加の一途を辿ったきっかけである、と言う。また、子どもの権利条約等の条約が多く設置されるようになり、児童相談所における児童虐待相談の対応件数の推移も、必ずしも虐待ではないものの、世間のこの事象に対する認知の広まりにより、児童虐待相談の対応件数に年々の増加が見られた。その後、児童虐待相談の対応件数の急増から施設が満員状態になったことから里親委託が注目されるようになった。

里親制度の基礎情報として、初めに意義について考えた。家庭養護の5つの要件として、①一貫かつ継続した特定の養育者の確保、②特定の養育者との生活基盤の共有、③同居する人たちの生活の共有、④生活の柔軟性、⑤地域社会に存在が挙げられた。朝おはようと言う人、寝る時におやすみと言う人、帰宅した時にただいまという人が同じであること。職員が風邪をひいたら、休暇を取るが、里親が風邪をひいていたら、通常より手伝いをすることや、親密な大人同士が喧嘩をして、どのような過程を経て仲直りをし、妥協点を見つめるのかを実際に見ること。里親さんが「今日は疲れたから外出にしよう」と柔軟に生活を送ること。地域のイベントやお祭りに参加するなど、家庭ではごく当たり前のことを経験できる場が里親である。里親の役割は、昼夜逆転等の基本的な生活習慣の確立や、地域や周りの人たちに助けてもらいながら豊かな人間性及び社会性の育成などが求められる。また、里親の種類には、養育里親、親族里親、専門里親、養子縁組里親の4種類あり、養子縁組をする際は、養子縁組里親さんと6ヶ月間一緒に生活を送った後、家庭裁判所が判断を下す。里親を始めるためには、経済的に困窮していないことや、委託児童の養育に専念できること等の要件がある。これらのことを踏まえ、里親委託を阻む最大の要因を考えてみる。一般的に、日本は血縁主義だから血が繋がっていない子どもを嫌う傾向があるのではないかと、キリスト教などの宗教的な背景が異なることから里親をやりたいと思わないのか、と言われがちである。しかし、保護された子どもは、児童相談所に行った後に里親家庭に行くが、支援体制が不十分である理由から、施設に行きがちになってしまう現状がある。施設だと十分な支援が可能だが、里親家庭であると問題が生じた時の処理が困難なのである。

かつて、里親に委託された子どもと実親との関係性は、現在より希薄で、実親との交流は少なかった。1990年代においては80%の人が実親との交流がなかったが、現在においては60%の子どもが実親との交流がなく、徐々ではあるが減少している。里親制度において、委託解消後、里親と子どもの関係は断絶される。関係性の継続はほとんどなく、里親は喪失感を得て悩む人が多い、と言う。先生は、大人が深刻に悩むほどであるのならば、子どもも同様又はそれ以上なのではないかと考え、なぜ里親と子どもは断絶されるのか、そして、措置解除・措置変更後の子どもと里親の交流継続は子どもの利益にならないのか、という事象に着目して調査を

実施した。各自治体の里親さんと子どもの関係性について、2023年6月から9月にかけて、全国の都道府県、政令指定都市、中核市、特別区にアンケート調査票を配布し、自治体の考えを伺った。回収率が約7割であることから、どの自治体も関心が高い項目であることがわかった。一つ目の調査では、里親委託中の子どもの実親と里親の交流について、原則的には決めていないが最も多く、ケースごとに対応を検討するものが多かった。委託中の実親と里親の交流のルールとして、子ども・実親が交流可能な状況であるか、子ども・実親・里親の了解を得られるか、子どもの不利益にならないと判断されるか等があるが、個々の状況に合わせて決めるなどのケースバイケースの項目も存在した。委託中の実親と里親の交流を原則認めない理由としては、里親家庭の安全確保やトラブル回避、里親の負担感回避等が挙げられた。二つ目の調査では、里親委託解除後の子どもと子どもの実親と里親の交流について、こちらも原則的には決めていないが最も多く、ケースごとに対応を検討するものが多かった。子どもと里親の交流ルールとして、子どもの不利益を考える、里親から連絡を取ることは控える等が挙げられ、委託解除後の実親と里親の交流を認めない理由として、実親対応の難しさや実親の拒否感等が挙げられた。三つ目の調査では、課題とメリットについて調査した。課題として、トラブルは実親さんと里親さん間が最も多く、トラブル19件、実親の里親への過剰要求15件にも上った。一方、メリットとして、子供への効果は、里親さんと実親が顔見知りになることが、子どもにとって安心感・居場所・支援・自己肯定感の増加、頼れる存在が増える、アイデンティティの形成、家庭復帰の状況がスムーズに行える等の多くの利点を秘めていることがわかった。

最後に、里親と実親と子どもの交流の可否は、調査の結果一つに決められないケースが多かったことがわかった。課題点に関しては、実親・里親の関係性悪化は、子どもにも影響が出ることを危惧する必要があり、また、子どもの生い立ちの整理については、課題と捉えている自治体とメリットと捉えている自治体と差があり、格差がある状況がわかった。一方で、子どもによってのメリットは、子どもの人生・安心感、ケアの連続性の保証等が挙げられた。以上のことから、実親と里親の交流は子どもの利益が大きいものの、重要なことはケースごとに対応することであり、委託解除後の対応も地域の関係機関に引き継ぐことや交流開始前、委託解除前にミーティングの開催が必要であるなど、細かな配慮が必要であると考察していた。

特別講演会に出席し、自分自身がこれまで家庭で生活してきた経験と里親制度を必要とする子どもが求める家庭での生活を重ねて考え、子どもは人間との関わりにおいて、特に家族との関わりが彼らのアイデンティティ形成において欠かせないものであると感じた。海外よりも里親制度が進んでいない日本は、文化的な背景ではなく、支援の不十分性に問題があることを知り、国から地方自治体までが里親制度に関しての考えの格差をなくし、制度を推進していくべきだと思った。また、私自身もこのような学びを通して、今後の社会福祉学の学びに寄与していきたいと感じた。

2024年度 学内学会活動報告

★会報第33号発行

6月1日(土) 発行部数 2,400部

★第34回総会・特別講演会

6月22日(土) 白金校舎3号館1階3203教室、Zoom会議室
対面41名(教職員4名、学生32名、卒業生5名)、オンライン2名
(教員2名)の合計43名が参加。

2023年度決算報告、2024年度予算案について参加者全員の賛成と委任状19通をもって承認された。

総会後は、社会福祉学科教員である三輪清子准教授による特別講演会『子どもと里親～地域社会における緩やかなネットワークの形成を目指して～』が行われた。

★研究発表会

12月14日(土) オンライン(Zoom)で開催した。

4分科会で合計35件の発表が行われた。内訳は、ゼミ発表6件(社会学科4件、社会福祉学科2件)、調査実習Gr発表2件(社会学科2件)、フィールドスタディー発表2件(社会福祉学科2件)、個人発表25件(社会学科11件、社会福祉学科1件、大学院社会学専攻7件、大学院社会福祉学専攻5件、卒業生1件)であった。

今年度もオンライン開催となったが、分野を越えて各々の問題関心を伝え合う貴重な時間となった。また会場の司会進行は学生会メンバーが担当した。

●第一分科会

穴戸 瑛仁(22SW)

新時代×ウェルビーイング 生きづらさにどう立ち向かうか

金 圓景ゼミ(3名)

多世代交流プロジェクトを終えて

金 圓景フィールドスタディー(3名)

韓国FSの成果報告と日韓の福祉課題に関する考察

金 圓景フィールドスタディー(3名)

【韓国FS】高齢者福祉領域での日韓比較

藤井 佳子ゼミ(3名)

離島における高齢者支援の現状と課題：
ゼミ合宿での学びを通して

加納 明美(23SWM)

生活保護更生施設における保護施設通所事業の現状と課題

薬師神 丈和(24SWM)

福祉事務所における生活保護の申請抑制に関する考察

須田 貴之(24SWM)

生徒を不登校にさせないために、学校ができることは何か
—パイロット調査からみえる学校ウェルビーイングと通学の関係—

三浦 恵美(24SWM)

独居高齢者の社会的孤立の現状と支援に関する文献検討

明石 和宏(23SWM)

ソーシャルワークにおけるジェネラリスト・アプローチと
高齢者虐待防止 —副田あけみの所説を通して考える—

●第二分科会

于 鴻楽(24SGM)

日本の専門学校に通う中国人留学生の学歴観

高橋 ここな(23SGM)

子ども会議は参加者にどのような作用をもたらすのか
—神奈川県川崎市を事例に

中川 花音(24SGM)

ジェンダーの視点から求められる法制度
—民事訴訟における住所・氏名等秘匿制度の適用可能性の視点から—

森下 恵理子(24SGM)

なにが経口中絶薬の普及を阻んで居るのか？
使用承認後1年目のアンケート調査結果の考察から(中間報告)

亀田 百花(24SGM)

The sound of HAPPY LAND —“最貧困地域”における芸術の営み

平安山 八広(24SGM)

ジェンダーを社会学する方法
—ジェンダーのメカニズムと主体の理論の可能性—

ZHANG TONG(23SGM)

父親の育児行動と育児ネットワークとの関係
—東京都心部の育児する父親を対象に—

入江 謙行(卒業生)

リトアニアにおける難民の起業促進による生活基盤と経済包摂の
実現に向けたICTを活用したコミュニケーション戦略の役割

●第三分科会

安藤 帆波(21SG)

居住地流動性と意見変容の関連性について

高木 優乃(21SG)

「かけがえのない友人」の持つ特徴とはなにか

山田 康裕(21SG)

福祉サービスが発達障害者に与える影響について：
発達障害者当事者の視点から考える

込山 ひかる(21SG)

若い世代の在日コリアンコミュニティ

二木 力星(21SG)

写真を交えた議論による人々への影響とは何であり、
どのように社会への発展に貢献するのか

山本 航大(20SG)

ファッションとアイデンティティの関連性

鬼頭 美江 実習クラス(8名)

マッチングアプリの利用実態に関する調査

石原 英樹 ゼミ(2名)

後期近代のコミュニケーションについて

●第四分科会

松波 康男 実習クラス(8名)

東京近郊に暮らすムスリムの宗教生活

野沢 慎司 ゼミ(5名)

現在のヤングケアラー支援は子どもたちを救えるのか

鬼頭 美江 ゼミ(8名)

鬼頭ゼミ①恋愛関係に関する検討

鬼頭 美江 ゼミ(5名)

鬼頭ゼミ②友人関係とSNSに関する検討

富永 匠一(20SG)

コミュニケーション運動「部族」

杉浦 瑛(21SG)

ミュージカルはなぜ社会にウケるのか?

上條 愛弥(21SG)

マンガキャラクターの印象評価

金 滉基(21SG)

『季刊まだん』にみる1970年代の在日朝鮮人の
結婚意識と世代交代の様相

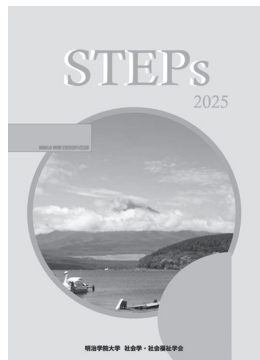
岡田 真悟(21SG)

親から不利益を被る子どもの見えづらさ

★STEPs 2025発行

3月1日 発行部数1,500部

今年度より、学生会が前面に出た会報誌として、創刊。
企画・デザイン・編集も学生会STEPが担当した。



学生会STEP活動報告

【通年企画】

☆ HP運用

学生会が社会学部学生へのイベント情報や
役立つようなコンテンツを発信。

☆ X (旧 Twitter)・Instagram運営・質問対応

学生の履修やキャンパスライフの疑問や不安を解決する
窓口として運用。講演会などのイベント情報が掲載。

☆ 明学散歩

学内や学外の学生向けスポットを動画やInstagramの
投稿にして紹介する企画。



【年間活動】

★新入生学科ガイダンスでの広報

(担当:山本朱夏・溝口柚夏・二見綺音・内野優実・渡邊葵衣・保坂新)
4月1日(火) 新入生学科ガイダンスでは、Socially+2024を
含む資料を配布するとともに新入生の誘導を行った。また広報
の時間では、新入生の勧誘の為、学内学会の活動を紹介し学生
部会をアピールした。

★履修登録相談会:白金校舎

(担当:山本朱夏・上野文華・河南恭子・高木亜里沙・坂本琴音・三村
悠・松村知香・溝口柚夏・並木彩華・和泉昌希・二見綺音・内野優実・
原愛菜・石田莉花・草間琴美・濱崎麻由・渡邊葵衣・柴田康平)
4月3日(水) コロナ後初めての対面開催にも関わらず、多くの
人に参加いただいた。履修登録に不安を抱える新入生達を、経
験を踏まえて中立な立場からサポートした。(社会学科97名、
社会福祉学科12名)

★山中湖合宿

8月19～21日(月～水) STEP27名で山中湖にて合宿を行った。
白金祭や会報誌、ゼミサロンなど企画の活動を通して、STEP内
の懇親を深める良い機会となった。

★社会学科ゼミサロン

(担当:二見綺音・石田莉花・原愛菜・内野優実・西村海羽・滝本
耕平・松沼梨花・鬼頭志歩・古谷日菜多・田部真帆・小鹿香次郎)
9月28日(土)・29(日) ゼミ選を直前に控えた2年生を対象
に、教員を介さずに直接ゼミ生の声を聞けるイベントをオンライ
ンで開催。生配信では夏休みにも関わらず昨年よりも多くの人数
の参加があった。

★卒業生部会・学生会共催の講演会

(ライフプランナー 新美友佳子氏)

10月12日(土) ライフプランナー 新美友佳子氏をお招きし、
「大学生のためのライフプランニング」というテーマのもと、
ご自身の体験談からライフプランニングの重要性をお話いただ
いた後、実際にライフプランニングの作成を行った。白金校舎
での対面とオンラインのハイブリッドで行い、学生会10名、
卒業生部会1名、外部参加者3名の14名が対面での参加、オン
ラインでは11名の視聴数となり参加者から好評であった。

★社会福祉学科ゼミサロン①フィールドワーク

(担当:濱崎麻由・草間琴美・渡邊葵衣・保坂新・荒牧美羽・柴田康平)
10月19日(土) 今年度初企画として、2年次から始まる
フィールドワーク選に悩む社会福祉学科生(福祉開発コース
選択生)の参考となる情報をオンラインで提供した。

★白金祭

11月1～3日(水～金) 昨年度初めて参加した白金祭に今年も
参加。教室で縁日と称し、型抜き・ヨーヨー釣り・的当てを企画した。
また、社会学・社会福祉学に関するクイズも映像として作成し、
スクリーンに映すという形で楽しんでいただいた。沢山の方が訪れ、
学内学会を広く知っていただくことができた。

★社会福祉学科ゼミサロン②演習1

(担当:濱崎麻由・草間琴美・渡邊葵衣・保坂新・荒牧美羽・柴田康平)
11月24日(日) 3年次から始まるゼミ(演習1)選に悩む
社会福祉学科生(福祉開発コース選択生)の為、オンラインで情報
提供をした。この企画も今年初めて取り組んだが、参考になった
という感想をいただくことができた。

異動・消息

2024年7月 社会福祉学科 深谷 美枝教授 ご逝去

学内学会 新体制

会長	新保 美香 (社会学部長・社会福祉学科教授)
副会長(主任)	明石 留美子 (社会福祉学科教授)
副会長	加藤 秀一 (研究所所長・社会学科教授)
編集担当	柘植 あづみ (社会学科教授)
企画担当	佐藤 正晴 (社会学科教授)
会計担当	加藤 丈太郎 (社会福祉学科准教授)
卒業生部会委員長	堀込 伸一 (1992年卒業)
学生会委員長	二見 綺音 (社会学科3年)

2025年度 学内学会活動予定

4月1日(火)	【学生会STEP】新入生学科ガイダンスで広報(白金校舎)
4月2日(水)	【学生会STEP】履修相談会(白金校舎)
4月3日(木)	【学生会STEP】履修相談会(オンライン)
6月1日(木)	会報34号発行3,000部
5月下旬	第1回合同役員会議(Zoom)
6月21日(土)	第35回総会・特別講演会・懇親会
8月中旬	【学生会STEP】合宿
9月下旬	【学生会STEP】社会学科ゼミサロン
10月下旬	【学生会STEP/卒業生部会】講演会
10月下旬	【学生会STEP】社会福祉学科ゼミサロン①フィールドワーク
11月1～3日(土～月)	【学生会STEP】白金祭
11月下旬	【学生会STEP】社会福祉学科ゼミサロン②演習1
12月13日(土)	研究発表会(開催方法未定)
2月中旬	第2回合同役員会議 (Zoom)
日程未定	【卒業生部会】社会福祉学科卒業生と在校生の交流会

第35回総会・講演会のお知らせ

今年度は白金校舎にて行います。特別講演会では、社会学科元森絵里子教授より「成人式」についてのお話をさせていただきます。またコロナも明け、社会学部60周年でもあり、会員懇親会をささやかに開催する予定です。事前の参加申込みが必要になります。詳細は以下をご覧ください。

日時：6月21日(土) 14:00～(受付開始時間 13:30)
会場：明治学院大学 白金校舎 本館2階 1201教室

1. 総会 14:00～14:45

2. 特別講演会 15:00～16:30

講演者：元森絵里子教授(社会学科)

講演テーマ：成人式を社会学する

——「若者」と「大人になる」ことの歴史的変遷

*講演会への参加も可能です。

3. 懇親会 16:45～18:30

会場：記念館大会議室(記念館2階)

*教員・卒業生会費：2,000円

要事前申込、先着40名。締切日：6月14日(土)必着

*参加ご希望の方は総会よりご出席をお願いいたします。

*出席の連絡はこちらのQRコードから、または以下の連絡先へメール・封書でご連絡ください。

*お申込みを確認後、後日事務局より

懇親会参加可否のご連絡をさせていただきます。

～社会学・社会福祉学会運営費のご協力のお願い～

本会の運営費は学生と卒業生の皆様の会費によってまかなわれています。会費は年2,000円です。充実した活動を行う為にぜひご協力をお願いいたします。また、会費を納入いただいた方には、会報や諸事業の開催案内等も送付予定です。

会費振込先：ゆうちょ銀行

店名 ○一九(ゼロイチキュー)店

預金種目 当座預金

口座番号 0096903

加入者名 明治学院大学社会学・社会福祉学会

振込依頼人名は「在学時のカタカナフルネーム」と「入学年」を記載ください。

例) 2018年入学、2022年卒業

明治学子(在学時旧姓：社会)さんの場合

振込依頼人名：シャカイガクコ 2018

※銀行振込・郵便振込が可能です。郵便振込をご利用の場合は、『払込取扱票』をご使用ください。確実な振込情報確認の為、銀行振込後は以下のQRコードより振込日をお知らせください。

※住所・氏名変更の際は、ハガキ・E-mail

又は以下のQRコードよりご連絡ください。



連絡先：〒108-8636 港区白金台1-2-37

明治学院大学社会学部附属研究所内

明治学院大学社会学・社会福祉学会

E-mail shakaimg@soc.meijigakuin.ac.jp